

西日本新聞日曜の連載記事「食卓は語る 現代家族の実像」をまとめる機会がありましたのでアップしておきます。連載1回目～3回目より(2011年9月18日31面、2011年9月25日35面、2011年10月2日29面)

食卓が語る家庭や育児の変化

「息子が朝食はプリンと言ったから」「おやつを食べ過ぎた娘が夕食は食べたがらなかったから」その通りにした。

時間に関係なく、「子どもがうるさいから」「子どもが待てないから」、すぐ出せる菓子パンや冷凍たこ焼き、ふりかけご飯などを与えてしまう。そのあとの食事にはもう興味を示さない。

○連載「食卓は語る 現代家族の実像」は、岩村暢子女史(アサツデー・ケイ(東京))による15年に及ぶ食卓調査のレポート記事である。近年の子どもの欠食や食事の粗末化、その現状を収集した食卓写真とともに伝えている。そこから見てきたことが、「親の不在」と「こどもの一人前扱い」。

家の中に親がいても、(育児をする)「親なるもの」がない《親の不在》。また、食事の良し悪しをまだ判断できないはずの小さい子どもの嗜好、「意思」を尊重する《こどもの一人前扱い》。

食卓が語るものは、食に留まらない家庭や育児の現状の問題なのである。岩村氏はこれを、「子どもに対する「悪意なきネグレスト(育児放棄)」と呼んだら、言い過ぎだろうか」として、読者に問題を呈している。(参照 次ページ切り抜き)

○一方で「よい育児」の認識自体が変わってきている。最近の主婦が手作りをせず、出来合い品や冷凍食品、レトルト食品などが多用している状況を、岩村氏は単に「『手抜き』とばかりは言えない。」と指摘している。

「よいお母さん」とは、「今日はこれよ」「出されたものに文句を言っははいけません」と言える人ではなく、家族それぞれの好みや都合に合わせて満足させるものを用意できる人だと思われる。

つまり、「よいお母さん」であるために手作りができない状況。(一般的解釈とは逆であり、新鮮である。)

「個人個人が食べたい時に食べたいものを食べられる、それは今の家族にとってとても大事なことになっている。それというも、いまの家族は『個の尊重』を重視するからだ。しかし、ここで言う『個の尊重』とは人間としての個人の自由や権利の尊重のことでなく、『自分の好みや都合を他の人に合わせることなく、どこまで通せるか』という程度のことだ。それが可能な背景には、外部サービスの充実やそれを利用できる経済力の増大もあるが、それよりも、違いを指摘しあったり、けんかも含めて深くかかわって問題を調整することより、表面的な『仲良さ』、いまこの葛藤のない円満な関係を指向するからだ。だから、いったん問題が起これば『仲良く』暮らしていたはずの夫婦や親子がいきなり危機的な状況に陥るあやうさも常にはらんでいるのだと思う」(<http://adv.yomiuri.co.jp/ojo/02number/200309/09toku3.html> より)

○子どもの食習慣は親の食習慣に依る。岩村氏が近年気になっているのは、「お菓子を食事代わりにしたり、だらだら食べ続けて食事をおろそかにしたり、食後のお菓子を目的に食事を軽くしてしまったりする親たち」である。

朝食にカステラやドーナツなどお菓子っぽいものを食べ、ビールのつまみにお菓子類を食べる親たち。休日は朝から「だらだらとお菓子を食べ続ける」のが習慣化している夫。食後の「ご褒美菓子」目当てに家族で白いご飯だけ完食、食後はポテトチップスやチョコケーキを「毎日びっくりするくらいたくさん食べる」。「(主婦の)私がチョコ好きなので」小学生の子どもたちとの朝食にも、板チョコが皿に出されたりする。

『小さい頃から好きなものばかり食べて育った』『子どもの頃からそうしてきた』という食習慣。そして『食事はあれを食べなきゃダメみたいなこと、言いたくない』という自由思想である。だから、反省や後ろめたさはない。

家庭の食卓の姿は、家庭の姿です。そしてそれは更に、私たち社会そのものでもあります。これからの食卓～家庭～社会はどうなっていくのでしょうか…。連載は来週以降も続きます。

2011/10/2 たべつむぎ

(下図 西日本新聞朝刊 2011年9月18日 31面 記事)

※新聞社からのご指摘により、ここに添付した新聞記事の切り抜き画像は削除いたしました。
著作権などへの配慮に欠けており、大変失礼いたしました。
興味を持っていただいた方は、ぜひとも新聞記事をご覧ください。
2011/11/10 たべつむぎ